

堤芳男先生と備前西大寺会陽

岡山民俗学会会員 丸谷 憲二

1 はじめに

平成 22 年（2010）は、備前西大寺会陽 500 年です。会陽の起源研究の最大の功労者が堤芳男先生であることを知っている人は少ないです。昭和 55 年（1980）1 月 19 日付けの中国新聞「西大寺裸祭り 宝木のルーツ？ 見つかる」のみが、堤芳男先生の業績を紹介しています。22 日付けの山陽新聞「最古！470 年前の宝木発見」では、「堤芳男先生の名前と根木家の伝承」が欠落しています。

2 堤芳男先生 最古の宝木（シンギ）発見

中国新聞の記事からの抜粋は次の通りです。

この“宝木”は、岡山市西大寺神崎町、製造業根木市太郎さん（53）方に秘蔵されていた。

根木さんの先祖は戦国時代に吉井川であった福岡合戦で山名氏に敗れた赤松氏の落ち武者の一人。仏像を背負って川を渡り、同所に住み着いたと代々言い伝えられている。

木箱は「開けたら目がつぶれる」と家訓で戒められ、床の間の仏壇に安置されたままになっていた-という。

この戒めを破って木箱を開けた郷土史愛好家は、同市西大寺上一丁目、旭東中教諭の堤芳男さん（49）。根木さんの子供が堤さんの教え子で、仏像の研究をしていた堤さんは秘蔵の仏像の話聞き込み「目がつぶれてもいいから・・・」と根木さんを押し倒して木箱を開けた。

木箱の中からは、西大寺観音院の仏像である金箔の千手

観音、それに問題の“宝木”二本と“枝牛玉”一本が出てきて堤さんはびっくり。先端にT字形の切れ込みがあり、そこにはさんだ和紙も見つかった。・・・それでも堤さんは「仏像は室町時代末期のもので、根木家の言い伝えから、この“宝木”も当時のものに間違いないのでは・・・」とルーツ説を強調。・・・今度、見つかった牛玉の字体は、安政以降の版木にはないので、宝木の原形の可能性もある。



根木市太郎様



厨子内の如意輪観音

宝木（牛玉）2本と枝宝木（枝牛玉、串牛玉、一般には「くしご」という）1本の3本が発見されました。発見された宝木は、現在の宝木と同様に先端にT字形の切れ込みが施されていました。

「牛王宝印」とは、寺社が信者に配る厄除けの護符のことです。

西大寺観音院の寺伝によれば永正7年（1510）に、忠

阿上人によって会陽が始まったと伝えられています。最初は「牛玉 西大寺 寶印」と刷られた牛王宝印紙の授与でした。天正年間（1573～1592）以降、元和2年（1616）に至る過程の中で牛王宝印紙を遠方の参拝者に授与するために、錘として、手元にあった木の棒（ネコヤナギ）に牛王宝印紙を巻きつけて投下し、この木の棒をシンギと呼ぶようになりました。元和二年というのは根木さん方から発見された如意輪観音の台座の裏に「元和二年」と書かれていたからです。厨子の中から発見された宝木も同年代と考えられるからです。

3 古シンギはヤナギ 『西大寺観音院の宝木伝承公開』

『昭和55年 西大寺会陽記録保存報告書』の最も重要な記録が、『シンギの材質がヤナギ』と云う寺院伝承の公開です。

『投げ牛玉は、枝牛玉、串牛玉とも云い、一般的には「くしご」と称され、柳の木を約7寸に切り二、三分角に割って作る。宝木の残り材をもって作ったという意味もある。』

私は「宝木の材質はヤナギ」だったという事実を始めて知りました。このことを話すとほとんどの人は信じません。平成4年（1992）3月2日に、奥田一郎氏と根木市太郎家を訪問し、3人で現物を確認し断面形状より「ネコヤナギ」と断定しました。西大寺観音院の正式伝承である「ネコヤナギのシンギ」は元和二年（1616）の2本しか発見されておりません。

「ヤナギはインドや中国では重要な漢方薬だったことから「漢方が関係するのでは」と推定し、仏教医学の立場から解明できないかと研究しました。ヤナギは、仏教医学に欠かせない重要な万能薬、風邪薬でした。

江戸時代までは寺が“病院”と“学校”の役割を果たしていました。

4 柳浄水・楊枝香水・得大靈驗

私は請観音経の中の「楊柳浄水」の解析が仏教医学の最重要課題であると考えます。弘法寺修正会法則では、「楊枝香水・得大靈驗」とあります。華道・生け花を趣味とされている方に「花瓶にカワヤナギ（ネコヤナギ）を挿しておく、約1週間で根が生えます。」という話を聞き、ガラスの花瓶にカワヤナギを挿しました。約1週間で根が生えてきました。そのままの状態でも6カ月間放置しました。花瓶の水は6ヶ月たっても腐りません。透明なままです。正に「楊枝香水」です。物凄い殺菌効果があるということです。この花瓶の水を楊枝水と呼びます。

起死回生の甘露水。楊枝をうるおした水。死にそうなの金魚鉢に、この花瓶の水をさしたら生き返りました。私は、この楊枝水が古代における万能薬であったと考えます。

5 枝牛玉

会陽では、宝木争奪戦の前に「枝牛玉の争奪」が行われます。枝牛玉の形は割り箸に似ています。私は奪い合うのだから、「奪い合うだけの価値がある」と考えました。

西大寺会陽記録保存報告書には『大正の初め頃までは、当日世話形方が集まり、すでに作り上げている牛王串（串牛玉あるいは枝牛玉）を本堂に運び、本尊の左右の須弥壇上に積み上げることが行事でした。その数は3

万本もあったといわれ、昭和の初め頃までは寺内で、事始めのことを「牛玉積み」と言っていた』とあり、3万本とは参詣者の全てに1本ずつ授与可能な数量です。この記録により、西大寺会陽で一番重要な行事が「枝牛玉の授与」にあることがわかります。



天明4年（1784年）枝牛玉

6 まとめ

堤芳男先生の元和二年（1616）の古宝木（コシンギ）発見は昭和55年（1980）です。『古シンギの材質がヤナギ』との観音院伝承が公開されたのも昭和55年です。

「西大寺会陽に参加すると風邪をひかない」という伝承が最大の謎でした。ヤナギがその謎を解いてくれました。シンギと牛玉（牛黄）との関係が明確になりました。アスピリンはヤナギに含まれるサリチル酸から合成された薬剤です。（投稿は18ページ、内容抜粋）